

# 講評文

12月24日 3番目

新湊高校

## 「どよ雨びは晴れ」

この劇は小川真澄と清水舞の二人組、修学旅行委員長の中野美樹、女好きの湊祐一、その彼女である金谷真衣と須藤恵梨、須藤が好きな中條晃司と河野香織の9人の高校生が織りなす、コメディでありながら、高校生ならではの人間関係をリアルに描き出した劇であった。特に、作中ずっと仲違いしていた金谷と須藤が最終的に打ち解け、ずっと降っていた雨が止んで虹がかかるラストシーンは非常に印象的であった。

二人が和解する場面からは、ことわざの「雨降って地固まる」というテーマが感じられた。この劇では最初から雨が降っており、金谷と須藤の関係性もあまりよくないものであった。だが、湊の浮気をきっかけに金谷は裏切られた気持ちになり、須藤との思い出に浸り、しだいに誤解は解けていく。その過程が、天気が晴れ、虹が出るという演出によって、今この瞬間に互いの「わだかまり」がなくなったことを鮮やかに象徴していたと思う。

また、照明・大道具の効果を存分に活用していた点が素晴らしかった。例えば、小川が教室に入り電気を付ける場面では、三つのスイッチで三段階に分けていた。さらにホリが青→紫→青紫→赤の順番で明るくなっていて、これは天候だけでなく心情の変化も同時に表していたと思う。大道具は一目で観客を舞台に引き込む「くの字型」の配置がされ、掲示物が貼ってある黒板や、すりガラスの窓など、細部までこだわりが感じられた。

技術面では、役者の雑談シーンは誰が喋っているのかわからなくなりがちだが、上手く音量を調節して誰が喋っているのかが明確であった。さらに教室の角や真ん中に固まることなく役者全員が程よい距離感であり、相手に応じた話し方、行動の仕方などのキャラの個性がはっきりしていて、役者一人一人がしっかりと考え、演技していたことが伝わってきた。

今、思春期の私たち高校生に向けて「雨降って地固まる」というメッセージを、役者自身が楽しみながら、コメディを通じて届けてくれた、見応えのある作品であった。新湊高校のみなさん、お疲れ様でした。